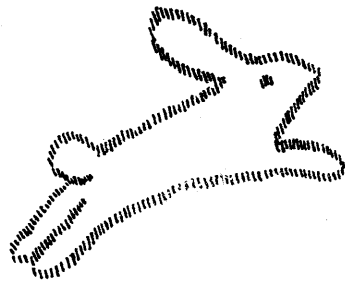


黄色い 兔

——黒ちゃんのお葬式——

蕪木 寿江



「白い箱はさびしい」と言って、折紙でお花を切って貼りました。赤や黄色やピンクのお花が一べんに咲いて賑やかになりました。兔の好物の人参や、蠟燭の灯ったクリスマスツリーまで銘々が思い思いのものを作って、周りに貼っていきました。でも、黒ちゃん一人入れるのは可愛想だといって白い兔を箱の中に描きました、ここでしばらくもめていました。描かない方がいいという意見

もありました。

黒ちゃんは五匹生まれた兔の一匹です。ほかの兄弟よりも一番早く穴から出てきました。「どの兔がお母さんなのかわからない」「毛が抜けている兔だよ」「自分の毛でフワフワベットをつくるんだって」「大人がみんなおいしい餌を食べちゃうよ」「子どもにとっておかないよ」「お父さんいるのかな」「大人が踏んづけちゃうー」「早

く抱っこしたいな」

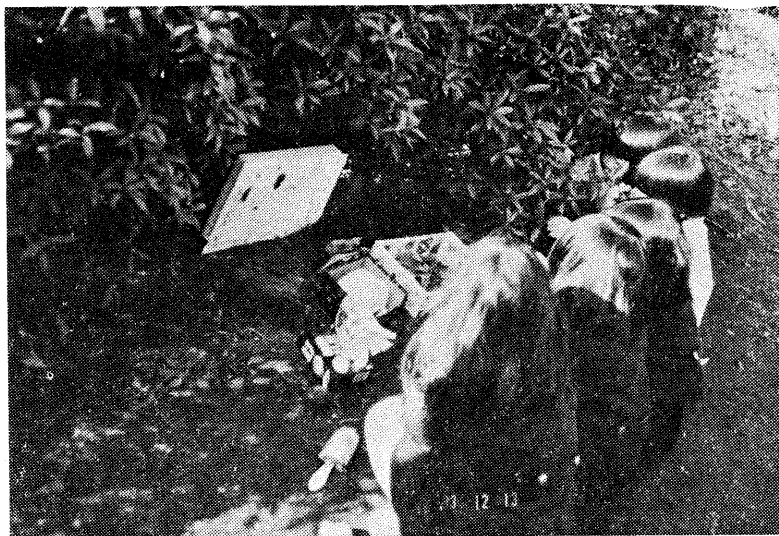
黒ちゃんが死んだ十二月十三日の火曜日は、お日様が照っているのに寒い日でした。園庭にオルガンを出して、お葬式をしました。讃美歌三〇六番「主よみもとに近づかん」の流れる中で、手に手に黄菊の花びらを持った子ども達の長い列がいつの間にかできていました。砂場のカップにお線香をたてて、その香の中で一人一人が黒ちゃんにお別れをしました「つめたいね」とさわっている子ども、静かに撫でている子ども、いつまでも目をつむって手を合わせている子ども、カップのご馳走が次から次から運ばれて机の上は一杯になりました。

「先生、先生、黒ちゃんが黄色い兎になったよ」と、大声で話をする子どもにつられて、「ほんとだ、黄色いお花になったー」と、とたんに笑い声のはじけて飛んで行きました。

「穴は広く掘ってね、黒ちゃんが出てくるのに窮屈だからね」とシャベルで裏庭にお墓を掘っている先生に子どもが囁きました。どこから持ってきたのか大きめの丸

い石が置かれ、その石に紙の首飾りを巻き、棒切れにまだ固い蕾の沈丁花の枝を折ってはセロテープでとめて挿し、「黒ちゃん、もうじきお花が咲くわよ」と話しかけたり、砂のケーキやつるつるカップ、ジュースにおだんごなど、かわるがわる並べ、ふだん誰もいない北側のお庭も子ども達の声がいつまでも聞こえていました。黒ちゃんがお腹がすくといけなからと言っては、冬草の中に僅かに生えているたんぽぽの葉を取っては、供え、それが減っていたと言っては喜び、天国から幼稚園にくるんだと信じ、朝はバスから降りるとカバンをしまったままそこに走り、帰りは必ず「さようなら」と言いに行ってはきょうの日が終わって行きました。幼稚園の話を減多にしない子が、「兎のお葬式をしたんだよ」と父親にも話し、びっくりしたと言って子どもに連れられて見えたお母様もいらっしました。

殆んどが核家族で生活している現在、身近に「死」というものにふれたこともなく、死の悲しみも莊嚴さも知らず、従って生きることの意義もわからないまま過ぎて



▲黒ちゃんの墓

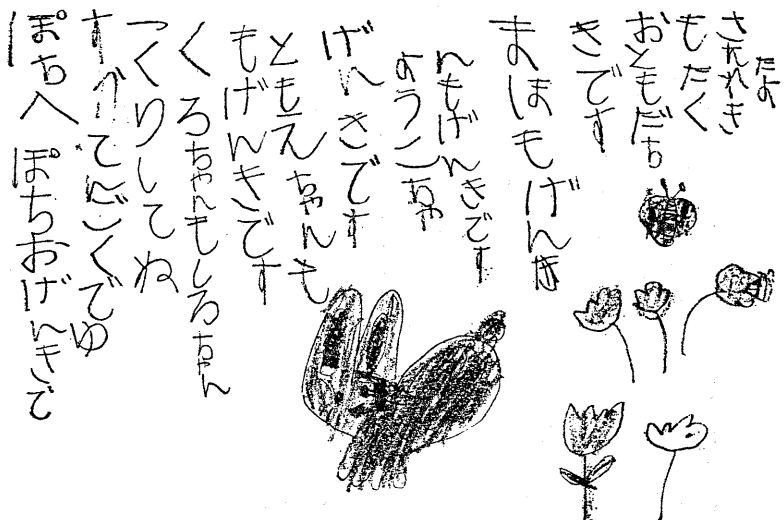
いくことが多い現在、黒ちゃんの死を通して、生命のいとおしさ、大切さをしみじみと味わい、子ども達の中から学んだことでした。

黒ちゃんは死んで「ポチ」という名前を貰いました。「ポチのはか」と書いたボール紙の立て札を立てました。

さて、ポチという戒名をもらったばかりか黒ちゃんは、たくさんのお手紙をもらいました。最後に、そのいくつかを紹介させていただきます。

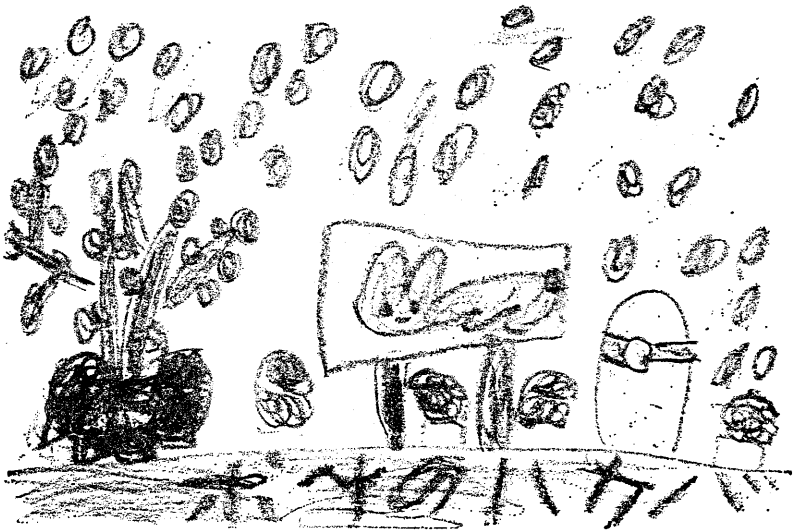
*

*



<3>

▼表



▼裏

あしー二
まててね
ますから
かってきたあげ
こいぞアプレゼント
できましたか
おともだちがいらっ
ぽちあげんさいですか
ナナナ、まーポチ



おおいしまゆ。おんまげ。
 ん。ごすか。あ。も。ち。か。で。
 ましたか。み。あ。ち。か。ん。も。
 ん。い。です。ま。ゆ。ち。か。ん。も。
 し。い。です。あ。ま。ち。か。ん。も。
 ん。い。です。か。ら。あ。い。せ。
 ん。も。い。い。です。あ。ま。ち。か。ん。も。
 て。た。の。く。ら。い。て。く。だ。さ。い。